【要約】

Parents' perspectives on relationships with adolescents with internet addiction

（インターネット依存を持つ思春期の子どもとの関係性に関する親の視点）

千葉大学大学院医学薬学府

先端医学薬学専攻

（主任：清水栄司教授）

堀田　英樹

【はじめに】パソコン、SNS・スマートフォン、オンラインゲームなどの、いわゆる「インターネット依存」の報告が散見されるようになったのは、1990 年以降である。思春期の子どものインターネットの使い過ぎは、成績不振、自室への引きこもり、食生活の乱れ、睡眠不足など、深刻な問題を引き起こす。精神面では、抑うつ、攻撃性、精神症状全般の悪化、自尊心の低下などを引き起こし、個人の進路や社会的なサポートに好ましくない（Young：2007、Mihara ら：2016 ）。このような流れから、2013 年に「精神障害の診断と統計マニュアル第 5 版（DSM-5）」にインターネットゲーム障害（IGD）の診断基準が盛り込まれた。さらに、2018 年 6 月に世界保健機関（WHO）が発表した国際疾病分類第 11 版（ICD-11）にも、ゲーム障害の診断基準が盛り込まれた。

本研究とは別に、我々は、12 歳以上 20 歳未満のネット依存状態にある未成年者の保護者（成人）を対象とし、遠隔からテレビ会議システムを用いて認知行動療法を提供する群が、待機リスト対照群に比して、ネット依存の重症度が軽減するかという有効性について検証する、「ネット依存の未成年者の保護者に対する遠隔認知行動療法のパイロット・ランダム化比較試験」（千葉大学医学部附属病院倫理審査委員会：2018 年 5 月承認）を実施している。セラピストと保護者は「コミュニティ強化と家族訓練（CRAFT）」のマニュアルを参考とした 12 回のセッションを行い、保護者と未成年者とのコミュニケーションにおける問題点について解決を目指しているところである。Xu ら（2014）は、注意欠如・多動症（ADHD）、自閉スペクトラム症（ASD）のような発達障害とネット依存の関係を報告した。また、Yang ら（2016）は、良好な親子関係が思春期のネット依存と負の相関があり、親子の不和が子どものネット依存の増加と関連すると報告した。

本研究の目的は、子どもを持つ親を対象に匿名 Web アンケート方式による調査を行い、ネット依存の有無、程度、子どもの情動と行動の問題、親の養育スタイルの関係を検討することである。

【方法】12 歳から 17 歳の子どもを持つ保護者 600 名を対象に、Web アンケート調査を実施した。回答者はインターネット調査会社（株式会社クロス・マーケティング）を通じて募集され、匿名のオンラインアンケートに回答してもらった。アンケートは、「あなたの子供はインターネットに依存していると思いますか？」という質問に「はい」と答えた 300 人の保護者（以下、依存あり群）と「いいえ」と答えた 300 人の保護者（以下、依存なし群）の 2 つのグループとした。依存あり群 300 名の年齢は 35～65 歳、平均年齢 49.2 歳（SD=5.67）、依存なし群 300 名の年齢は 33～64 歳、平均年齢 49.1 歳（SD=5.06）であった。アンケートは各グループの保護者が 300 人に達するまで回収した。

本研究は、2021 年 9 月に千葉大学大学院医学研究院倫理審査委員会により承認された（M10095）。対象者には、研究に関する説明と同意を WEB 上の行い、インフォームドコンセントを取得した。

調査項目は以下の内容とした。

（1）親子間インターネット依存度テスト（PCIAT）

親から見た子どものインターネット依存症に関する質問項目は、20 項目の Parent-Child

Internet Addiction Test (PCIAT) を使用した（Young：2017)。ネットの使用が日常生活、家族関係、社会生活、個人の健康、心の状態にどの程度影響するかを 5 段階のリッカート尺度で評価し、最低点は 20 点、最高点は 100 点で、点数が高いほどネット使用による問題が大きいことを示す。20～49 点は、ネットの使用をコントロールできている平均的なユーザー、50～79 点は、ネットの使用で時々または頻繁に問題が発生するユーザー、80～100 点：ネットの使用により大きな問題が発生しているユーザーである。

（2）1 日あたりのインターネット使用時間

（3）子どもの強さと困難さ アンケート（SDQ）

Goodman（1997）が開発した SDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire）は、子どもの情緒と行動の問題を測定し、25 項目で構成され、下位に、4 つの問題の尺度（①情緒面、②行動面、③多動・不注意、④仲間関係）と 1 つのポジティブな尺度(向社会性）がある。「向社会性」を除く 4 つの下位尺度の合計点から、TDS（Total Difficulties Score：総合的困難さ）を算出した。各質問は,「あてはまる：2 点」「まああてはまる：1 点」「あてはまらない：0 点」の 3 つの選択肢から回答を得た。

（4）Parenting Style and Dimensions Questionnaire（PSDQ）

Robinson ら（1995）による養育スタイル尺度（PSDQ）は、親の養育態度を測定するための尺度であり、質問内容は全 62 項目である。指導的な子育て（Authoritative Items)27 項目、権威主義的な子育て (Authoritarian Items) 20 項目、放任的な子育て (Permissive Items) 15 項目の 3 分類に基づいた下位尺度からなる。各質問は,「全くしない：1 点」～「いつもする：5 点」の 5 つの選択肢から回答を得た。

（5）Self-Report Attachment Style Prototypes 愛着スタイル尺度（関係尺度 Relationship Questionnaire：RQ）

Bartholomew ら (1994) の Self-Report Attachment Style Prototypes は、「一般他者 (人)」との関係について 4 つの愛着スタイル (安全型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型) を測定する。対象者は、最初に、4 つの愛着スタイルの記述文のそれぞれについて、どの程度自分に一致しているかを、7 段階（1＝全くあてはまらない～7＝非常にあてはまる）で自己評定し、次に、その 4 つのスタイルから自分に最も当てはまると思う愛着スタイルを 1 つ選択する。本研究では、①親自身の愛着スタイルと②子どもの愛着スタイルについて、それぞれ回答を得た。

また併せて、対象者の背景情報（親の年齢、性別、居住地域、雇用形態、子どもの年齢、性別、出生順位）を調査した。

統計解析は、600 人の回答者の記述分析（数、度数、パーセンテージ、平均、標準偏差）を行った。依存あり群 300 名と、依存なし群 300 名の回答は、t 検定を用いて項目の違いを比較した。性別、配偶者の有無、出生順の頻度については、カイ二乗検定またはフィッシャーの正確検定を用いて分析した。参加者の特性については、両側有意水準 0.05 未満を適用して p 値を検討した。SDQ、PSDQ、RQ については、多重比較によるタイプ I エラーのリスク増大を避けるため、ボンフェローニ補正を用い、p 値の閾値を 0.05/19＝0.0026 に設定した。すべてのデータは IBM SPSS ver. 22.0.を用いて分析した。

【結果】

保護者の平均年齢は、依存あり群が 49.24 歳（SD=5.67）、依存なし群が 49.07 歳（SD=5.06）で、両グループに有意差はなかった。配偶者の有無については、両群とも全体の約 95%が「既婚」であり、有意差はなかった。男女比については、両群間に有意差があった。男性比率は、依存あり群の方が依存なし群より高かった。子どもの年齢は、依存あり群 15.01 歳（SD=1.59）、依存なし群 14.95 歳（SD=1.58）であり、両群間に有意な差は見られなかった。出生順は、第一子が約 60%、第二子が約 30%、その他が約 10%で、有意な差はなかった。

PCIAT の得点は、依存あり群（55.41 点、SD=15.78）がカットオフの 50 点を超え、依存なし群（35.55 点、SD=11.64）より有意に高かった。一日のネット利用時間は、依存あり群（4.0 時間、SD=2.06）が依存なし群（1.7 時間、SD=1.06）より、有意に長かった（$p<0.01$）。

SDQ では、依存あり群の TDS の平均点が依存なし群に比べ、有意に高かった。下位尺度項目においては、依存あり群の情緒面、行動面、多動・不注意の平均点は、それぞれ依存なし群に比べ有意に高い値を示した。PSDQ では、権威主義的な子育ての平均点は、依存あり群の方が依存なし群より有意に高かった。指導的な子育てと放任的な子育てには両群間に統計的な有意差はなかった。RQ では、安全型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型において、依存あり群と依存なし群の両群間に統計的な有意差はなかった。

次に、依存あり群 300 人のうち、PCIAT50 点以上の 190 人（63.3%）を「高ネットユーザー群」とし、依存なし群 300 人のうち、PCIAT50 点未満の 258 人（86.0%）を「低ネットユーザー群」として抽出し、サブグループ解析を行った。

SDQ では，高ネットユーザー群は、低ネットユーザー群に比べ、TDS，情緒面、行動面、多動・不注意、仲間関係の下位尺度で統計的に有意に高かった。向社会性については、有意に低かった。PSDQ では、権威主義的な子育てと放任的な子育てにおいて、高ネットユーザー群が低ネットユーザー群と比べて有意に高かったが、指導的な子育てにおいては両者間に有意差は認められなかった。RQ では、①親に関しては、いずれの項目においても統計的な有意差は認められなかった。一方、②子どもに関しては、「恐れ型」にのみ、高ネットユーザー群が低ネットユーザー群に比べて有意に高い結果となった。

【考察】

本研究では，親の養育スタイルと思春期の子どものインターネット依存やメンタルヘルスとの関係を調べるために，質問紙調査を実施した。近年，思春期を対象とした研究により，インターネット依存と発達障害との関連が示唆されており，ADHD だけでなく、ASD もインターネット依存のリスクと関連することが分かってきている。Cakmac ら（2018）は、12 歳～16 歳の ADHD の子どもの 1 週間のインターネット利用率は、対照群よりも高かったと報告している。Kawabe ら（2019）は、ASD55 人のうち 25 人がインターネット依存度テストを用いてネット依存症に分類されたと報告した。

今回の研究では、ADHD および/または ASD の診断を含めることはできなかったが、

SDQ スコアを測定したところ、依存あり群の SDQ スコアの TDS は、依存なし群に比べて有意に高かったため、依存あり群における、子どもの発達障害的な問題での支援の必要性の高さが示唆された。Bear ら（2012）は、コンピューター/ゲーム依存症（CGAS）スコアが SDQ スコアの合計値と有意に相関していたと報告した。また、Akdeniz ら（2020）は、SDQ の TDS がインターネット依存群が依存なし群に比べ、得点が高かったと報告した。以上は本研究の結果と一致した。

また、インターネット依存の子どもと保護者との親子関係に関する研究は、子ども側の視点から行われたものが多かった。本研究では、親の視点に注目し、インターネット依存の子どもを持つ親の養育スタイルについて調査した。子どもの視点からの研究として、Dogan ら（2017）は、14 歳から 19 歳の中学校で学ぶ青年を対象に、インターネット依存の認識と養育スタイルについて調査している。彼らは養育スタイルを測定するために Kuzgun‘s Parental Attitude Scale を使用し、その結果、依存ありの子どもは、依存なしの子どもに比べ、親の態度を、保護要求的（protective demanding）な養育スタイル、権威主義的(authoritarian)な養育スタイルととらえていることが明らかにされた。

本研究では、 Robinson ら（1995）が作成した養育スタイル尺度である PSDQ を用いたが、依存あり群は依存なし群の親に比べ、権威主義的(authoritarian)な養育スタイルが有意に高かった。親から回答を得た本研究の Robinson らの PSDQ の 3 下位尺度と、子どもから回答を得た Dogan らの研究の Kuzgun‘s Parental Attitude Scale の 3 下位尺度は、同一でないため、単純な比較は難しいが、権威主義的(authoritarian)な養育スタイルとインターネット依存の関連は一致しており、親と子どものとらえ方が一致している可能性が示唆された。

本研究の限界を以下に述べる。今回実施したオンライン調査では、貴重な情報を得ることができたが、サンプリング方法など、いくつかの制約がある。

1. 本調査は Web 上での調査であり、参加した保護者の子どもは、医師からインターネット依存症と診断されていない。
2. この調査では、子どもからのデータは収集されていないため、保護者の子どもに対する評価とは比較できなかった。

今後の研究では、医師の診断を受けたインターネット依存症ありとなしの子どもを対象にした調査を実施し、また、子どもと親の両方からデータを収集して、再現性を検討する必要があると考えられた。

【結論】本研究の結果から、自分の子どもがインターネット依存であると考える親は、そうでない親と比較して、子どもの情動と行動の問題の多さをより認識している一方で、より権威主義的な養育スタイルをとってしまっている可能性が示唆された。

現在進行中のオンライン認知行動療法の介入研究では、親が子どもに対する問題行動を適切に認知した上で、コミュニケーションスキルなどを用いて、望ましい行動を増やすような対処方法を支援するもので、権威主義的な養育スタイルの変容が期待される。